概説・日本庭園史

山村　賢治

序章　はじめに

庭園文化研究分科会では、過去数年にわたって、いわゆる「出雲流庭園」を中心に島根県内の主要庭園の現状について視察と考察を重ねてきており、その結果は既に各年度の「研究報告」において詳細に報告がなされている。対象となる庭園は殆どが近世以降のものであり、それらを歴史的位置づけという観点から再考するために今一度日本庭園史の概略について振り返って見たい。

第1章　先史時代（縄文・弥生・古墳時代）

この時代についての文献資料は皆無に等しく、主に発掘調査による考古学的成果や現存する遺跡から論ずることになる。

六世紀中頃、大陸から朝鮮半島経由で仏教とともに庭園文化も伝えられたと考えられるが、それ以前から日本列島に住んでいた古代の人々は、山や巨石でできた磐座（いわくら）・磐境（いわさか）、巨木に神が宿ると信じていた。また、水に対しても特別な思いを持っていたと考えられ、神聖な場を守るために結界として池を掘り中島を築き、神池・神島とした。こうした石や水に対する信仰が、後の庭園の造景とどう関係するかはわからないが、仏教とともに庭園文化がもたらされたとき、当時の日本人は比較的抵抗なくその文化を受け入れたと考えられる。

大型建物遺構でも知られる「山内丸山遺跡」（青森市）は、近くに秀麗な山を望める場所に位置しており、山に対して特別な霊力を感じ、崇拝の対象としていたのではないかと思われる。また葬送儀礼や「まつり」のための施設と考えられる「ストーンサークル」（環状列石）もまた、そこから望まれる山の存在が注目される。山を望める立地だけでなく、方位にも留意した配石遺構の関係性も指摘される。

弥生時代から古墳時代にかけての葬送・祭祀の場として、出雲地域には西谷墳墓群遺跡（弥生の森）（出雲市）、田和山遺跡（松江市）など全国的にも知られる大型の遺構がある。また伯耆・因幡地域には妻木晩田（大山町ほか）、青谷上寺地（鳥取市青谷町）の大規模集落遺跡がありその内容の豊かさが注目されている。

古墳を庭園の一種として見るかどうかは意見の分かれるところかもしれないが、各地の大型古墳には周濠に囲まれた、計画的に造られたものもあって、見方によれば庭園としての景観に優れたものも多い。卑弥呼の墓という説のある箸墓古墳（奈良県桜井市）、仁徳天皇陵とされる「大山古墳」（だいせんこふん）（大阪府堺市）など大型の古墳が全国各地に残されている。古墳の周濠は農耕祭祀の司祭であった首長が豊かな水を保証するための呪的機能をもつ意味とともに、水面と墳丘によって作り出される景観を美しいとする美意識があったとするならば、広い意味での庭園の概念に入れるべきではないだろうか。

第2章　飛鳥時代

日本における最も古い庭園に関する記述に、「日本書紀」に出てくる百済から来た「路子工」（みちこのたくみ）別名・芝耆摩呂（しきまろ）という人物が、異能をもってよく山岳の形をつくる才があり、須弥山や呉橋などを宮中の庭園に築いたという話がある。ここで言う須弥山・呉橋はいずれも庭園の主要構成要素となる石造物と考えられ、主に朝鮮半島から伝えられた先進の技術によって造られ、当時の人々を大いに驚嘆させたものと思われる。

古代の宮都が位置した現在の明日香村の庭園については、日本書紀や万葉集などの文献資料に基づいて研究が進められてきたが、近年の発掘調査の進展により庭園と言ってもよい遺構が次々に発掘されるようになり、それらによって飛鳥時代の庭園の実際が広く知られるようになった。（飛鳥京跡苑地北池・南池（7 世紀）など。）

飛鳥時代には蘇我馬子が自邸の庭に池を掘り池中に島を築いたことから嶋大臣（しまのおおおみ）と呼ばれたという記事もみられる。

飛鳥の石造物の中でも謎の石造物として名高い酒船石遺跡の北側に、給水施設としての機能を持つ庭園遺構が発掘され、その石の加工技術は秀逸で、やはり百済からの渡来人に由来する技術であろうと考えられている。この庭園遺構は斉明・天智・天武・持統の時代に継続的に施行された祭祀の場であったと推定されている。

飛鳥時代の庭園の最も特徴的な構成要素は、①方形など幾何学的平面系を持つ池、②その護岸としての石積み、③精巧な加工の石造物の 3 点である。いずれも百済からもたらされたデザイン及び技術とみられている。

第3章　奈良時代

風水の思想に従い、さらに遣唐使が持ち帰った唐都長安の都市情報も参考にして造られた平城京では、重要な儀式は大極殿など中心的な殿舎で執り行われたが、庭園を含む区画も天皇による儀式や饗宴などの場として重要な位置を占めた。

発掘調査を経て復元された「東院庭園」は、曲池と呼ばれる平面形、州浜、石組・景石と言った後世の日本庭園に引き継がれる様々なデザインが用いられ、しかもこれらが高い完成度を持っていることから、この時代には既にこのような高度の庭園デザインが十分定着していたものと考えられる。

長屋王邸や他の貴族の邸宅に造られたと考えられる庭園遺構も数か所発掘されており、①不整形な平面を持つ池（曲池）、②州浜に代表される池の護岸、③加工しない自然石をそのまま用いた景石または石組など、飛鳥時代の百済・新羅系のデザインとは異なる唐系の庭園デザインが用いられている。

奈良時代は東大寺をはじめ仏教文化の花が開いた時代で、興福寺境内の猿沢池、法華寺の阿弥陀浄土院庭園遺構など、建築と一体となって景観を形成する多くの遺構が残されている。寺院は後世の日本の庭園文化を形成する重要な母体であり、奈良時代の寺院において早くも庭園が営まれることは注目に値する。

第4章　平安時代

奈良時代に確立された日本庭園のデザインがその洗練の度合いを深めたのが平安時代である。風光と水脈に恵まれた平安京という立地を得て、京の内外に大規模な池庭が築造される。三方を山に囲まれ、大小の河川が南部の低地に向かって流れ下る京都盆地では、地質が変化する境界付近などで伏流水が噴出して池沼が多く出来、こうした豊かな水脈が、盆地を囲む山並みの姿の美しさとともに、平安京における作庭上の大きな利点となった。

文献資料では数か所の大規模な庭園が知られるが、今日部分的に残されているのは、京内では「神泉苑」（中京区）、郊外では嵯峨天皇の離宮「嵯峨院」のみである。

嵯峨野の大覚寺境内の大沢池（右京区）は、嵯峨院の園地の遺構である。北嵯峨山中から流れ出す谷川をせき止めて築造した大沢池は、面積が３３，０００平方メートル。池中に二つの島を配し、その二島をつなぐように「庭湖石」と呼ぶ立石（たていし）を池中に据えている。

景勝の地を選んで別荘を営み、そこに庭園を設けて理想の環境を創造するという文化は、平安時代を通じて脈々と受け継がれ、中世から近世、近現代に至るまでその系譜を保つことになる。

「寝殿造庭園」

平安時代の貴族の邸宅庭園、いわゆる「寝殿造庭園」の構造・デザインは、現存するものがないので文献資料や絵巻物等で推定するほかないが、典型的な住宅と庭園はおおよそ次のようなものであった。

敷地の標準は一町（約１２０ｍ）四方で、築地塀に囲まれ、東西北に門を開く。正門は東門または西門。邸宅の中心をなす寝殿が南向きに建つ。その東西北などには別棟の対屋（たいのや）が配され、寝殿と対屋は渡殿（わたりどの）と呼ぶ廊で結ばれる。東西の対屋からは中門廊が南に伸び、その先端には池に臨んで釣殿が設けられる。こうしたコノ字型配置の建物群の前面に、各種の儀式や行事に用いられる白砂敷の平坦な広庭を置き、その南に池を設け、北ないし北東方からの遣水（やりみず）によって池に水を引く。池には中島を配し、中島には橋を架ける。池の南に築山を置くこともある。以上は基本形であり、立地条件や広さ、水源の位置条件などでもそれぞれ個性的であったことは当然である。

「作庭記」について

寝殿造庭園の説明書として知られるのが世界最古の解説書といわれる「作庭記」である。関白・藤原頼道の庶子橘俊綱の編集というのが通説（異説あり）となっている。

作庭記の内容は、以下のような章立てで構成されている。

・石を立てん事、まず大旨（おおむね）をこころうべき也
・石を立つるには様々（ようよう）あるべし
・嶋姿の様々をいう事

・滝を立つる次第
・遣水の事
・立石口伝（たていしくでん）
・禁忌といふは
・樹の事
・泉の事
・雑部

これらは現代の日本庭園の作庭、さらに言えばランドスケープデザイン一般においてもほぼそのまま当てはめることができる基本姿勢であり、その先進性と普遍性は特筆に値する。章立ての項目からもわかるように、島・滝・遣水・植栽・泉などについても詳細な記述がある。そこには、陰陽五行説や四神思想に基づく禁忌なども記される一方、作庭にあたっての合理的な方針や技術の記述も数多く見られる。「作庭記」が平安時代の寝殿造庭園のみならず、日本庭園を理解するうえでも不可欠の書物であることは間違いない。

「浄土庭園」

源信（９４１～１０１７）が「往生要集」で極楽往生のための念仏の方法として、従来の称名念仏とともに仏や浄土の具体的な姿を思い描く観想念仏を説き、臨終の念仏を強調したことが、芸術や様々な分野に影響を及ぼすことになった。源信と交流のあった文人貴族・慶滋保胤（よししげやすたね）は、自邸として池亭を営み、記録によれば、地形を利用しながら池と築山を作り、池の西に阿弥陀像を安置した仏堂、東に書庫を配し、池の北に住居を建てたという。池を極楽浄土の宝池になぞらえて、西岸に仏堂を配置して阿弥陀如来の西方浄土と見立てる意識が明確に読み取れる。

摂関政治の絶頂期に藤原氏の氏長者としてその頂点にあった藤原道長（９６６～１０２７）もまた、源信の「往生要集」に深い影響を受けた一人で、自邸・土御門殿の東方の広大な敷地に法成寺を造営し、阿弥陀堂を無量寿院と称した。

法成寺阿弥陀堂は、九体の阿弥陀仏を安置したいわゆる九体阿弥陀堂で、以後九体阿弥陀堂は白河天皇造営の法勝寺のものをはじめ、多くの阿弥陀堂が造営された。現存例として、浄瑠璃寺（京都・木津川市）が知られる。鳳凰堂の名で知られる平等院（京都・宇治市）は、道長の嫡男・頼道が宇治川西岸の別荘を寺に改めたもので、現世に極楽浄土を築くことで自己の極楽往生を願ったものである。

浄瑠璃寺庭園（九体阿弥陀堂）

平等院庭園（鳳凰堂）

円成寺庭園（楼門）

平安時代後期の院政期に白河上皇が院御所として、賀茂川と桂川が合流する一帯の沼沢地に造営を始め、その後孫の鳥羽上皇などによって整備された鳥羽離宮（京都市伏見区）の庭園は、名神高速道路の建設工事の際の発掘調査でいくつかの遺構が明らかにされ、優れた寝殿造庭園と浄土庭園の複合型ともいうべきものであることがわかり、平安時代末期の最上級の庭園のデザインを示すものとして評価されている。

平安時代後期、金の産出と北方世界との交易で栄えた平泉では、奥州藤原氏の居館を中心に都風の文化が花開き、都市が計画的に整備され、大規模な寺院が建立された。初代・清衡が中尊寺、二代・基衡が毛越寺、清衡の妻が観自在王院、三代・秀衡が無量光院を造営し、それぞれの寺院に庭園が営まれた。

毛越寺庭園の中心をなす大泉池は東西約１８０ｍ、南北約８０ｍで、南東部の出島とその先の池中立石を中心とした荒磯（ありそ）と南西部の築山付近の石組、南門と金堂・円隆寺を結ぶ中軸線上に、中島を挟んで二基の橋が架かっていた。

秀衡の妹徳姫が夫の死を弔うために建立した願成寺、別名白水阿弥陀堂（福島・いわき市）は、平泉の泉を白水と読んで名付けられ、毛越寺と同じ思想で造られたものと考えられる。

毛越寺庭園

願成寺庭園（白水阿弥陀堂）

第5章 鎌倉時代

寛元四年（１２４６年）中国から渡来した禅僧・蘭渓道隆（１２１３～７８）は、鎌倉幕府五代執権・北条時頼に請われて建長寺（鎌倉市）の開山となり、そこに　中国式禅宗伽藍を建立した。以後、建長寺が日本の禅宗伽藍の規範となった。

風光に優れた場所を選んで寺地を定め、そこに建築群や庭園あるいは植栽を加えて総合的な環境を形成するというこの建長寺の伽藍のあり方は、伽藍とその周辺にある自然の山河や人口の建物・橋・庭園などを境致（きょうち：禅宗独特の言葉・伽藍一帯の自然・人工の優れた景観を指す）とし、それらに対峙して命名し、詩を詠むという宋の禅宗寺院における思想に基づくものであった。

八代執権・北条時宗の招請により、蘭渓道隆に遅れて来日し建長寺の住職になった

無学祖元（１２２６～８６）は蒙古襲来による戦死者を弔うために創建された円覚寺（鎌倉市）の開山となる。無学祖元もまた境致を重んじて伽藍を建立するが、谷戸の高低差を活かした円覚寺の境致は、建長寺とはまた異なったものであった。

無窓疎石（１２７５～１３５１）は、はじめ天台・真言を学び、さらに建長寺の渡来僧一山一寧に参じたのちに、臨済宗の高峰顕日の門下となりその法灯を継ぐ。当代随一の臨済宗の高僧であった無窓疎石は、一方で作庭にも傑出していた。各地を転々とする間も腰を落ち着けるのは眺望に優れた景勝地であり、あわせてそこに庭園を営むことが常であった。永保寺（岐阜・多治見市）、瑞泉寺（鎌倉市）、恵林寺（山梨・甲州市）、西芳寺（京都市）、天龍寺（京都市）などに疎石作庭の庭園が歳月や人工による変化を経ながら、現在も残っている。その作風は、境致を重んじる禅宗の考え方にも基づくもので、自然への深い愛情と天性の審美眼で優れた眺望・景観を活かすとともに、晩年の西芳寺と天龍寺では石組などにより禅の本質を表現しようとしたものであるという。

永保寺庭園（梵音巌）（観音堂・無際橋）

第6章　室町時代

室町幕府の最盛期を築いた三代将軍・足利義満（１３５８～１４０８）は、永和四年（１３７８）室町殿、いわゆる「花の御所」を造営する。現在の京都市上京区烏丸今出川の北西方一帯で、規模は南北１町半（約 180M）東西１町（約 120M）。寝殿を中心に公的儀式のための施設、日常的生活の場のほかに東部から寝殿にかけて配置されたと考えられる庭園は、賀茂川から引いた水を用いて滝と遣水をしつらえ、大きな池がその中心をなしていたようである。

室町幕府では将軍が替わるごとにその邸宅が造営ないし改修されたが、この義満による室町殿は以後の将軍邸の規範となり、六代将軍・義教や八代将軍・義政もこの地を踏襲して改修した室町殿を御所としている。

金閣寺の通称で有名な鹿苑寺（ろくおんじ）は、足利義満が西園寺家の北山第を譲り受け、改修して北山殿を造営し、その没後に禅寺としたものである。池に臨んで建つ金閣は、庭景の焦点となるとともに、西芳寺瑠璃殿と同様に庭園ないしは園外の眺望を楽しむという機能をもつものであった。鏡湖池（きょうこち）も西園寺家の北山

第の池を改修したものと見られている。

銀閣寺の名で知られる慈照寺は、八代将軍・足利義政が造営した山荘・東山殿を、義政の没後に禅寺としたものである。東山殿は、下部に園地を置き上部に枯山水石組を配するという構成や、建物の名称と位置関係など、義政がたびたび訪れ理想としていた西芳寺の庭園をモデルにしたといわれる。北山殿も東山殿も無窓疎石による西芳寺の影響を受けた山荘であるが、ともに江戸時代初期に大改修を受けており、今日見る姿は室町時代のものとは大きく変貌していることは明らかである。

鹿苑寺庭園（金閣）

慈照寺庭園（銀閣）

慈照寺庭園（東求堂）

「枯山水」

「作庭記」における枯山水は、池を中心に展開される寝殿造庭園の局部的な手法であったが、今日いう枯山水は、水を用いず石組を主体に自然景観などを象徴的に表現する庭園形式をいう。枯山水は、立地や広狭を問わず、管理も容易なうえ、観念的な造形も可能であることから、近世以降も寺院庭園などを中心として多様に、かつ多数築造され、日本庭園を代表する様式となっている。

大徳寺（京都市）の塔頭の一つである大仙院では、本堂の北側東部から東面の約１００平方メートルのカギ型の区画に築造された庭園は、住職の居室である書院からの鑑賞に向けた座観式庭園である。様々な色と形の石と砂を用いて、滝から落ちた水が渓流となり、橋をくぐり、大河となって流れ下る様相を表現する。

大仙院庭園

龍安寺石庭

小川家庭園（雪舟作）（江津市）

大仙院庭園のように具象的に自然景観を表現するのではなく、抽象的ともいえるデザインで有名な枯山水が龍安寺方丈庭園（京都市）である。「石庭」の名で知られるこの庭園は、築地塀で囲われた約３００平方メートルたらずの平坦な庭一面に白砂を敷き、そこに五群、大小十五個の石を配置した枯山水である。作者や作意について様々な解釈がなされているが、いずれも確かなものはない。

「戦国大名の庭園」

室町時代前半の京都は、各国の守護大名や幕府直属の国人（在地領主）が在住し、まさに「武家の都」の様相であった。これらの守護大名や国人は、領国では京都の将軍邸を規範に居館を造営していた。六代将軍・足利義教（よしのり）の室町殿では、公式儀礼の場である「寝殿」、普段の住居としての「常御所」、社交・接遇の場所としての「会所」という三つの建物群が区画され、それぞれに対応して庭園が設けられていたが、居館はこのような構成をモデルに造営されていた。

周防国の大内氏の館（山口市）、一乗谷朝倉氏遺跡（福井市）などのほか、各地に設けられていた有力武家の居館庭園の発掘が進み、それぞれ個性のある庭園の有様がうかがえる。

「雪舟」

画聖として名高い雪舟（1420～1506）は、中国（明）で約 2 年間本場の山水画を学んで帰国後、周防山口を拠点にいくつかの庭園を手がけている。代表作として常栄寺庭園（山口市）、島根県にも万福寺庭園及び医光寺庭園（益田市）、小川家庭園（江津市）がある。

第 7 章　安土桃山時代

「茶室と露地」

鎌倉時代に禅宗寺院を中心に武家の間で行われていた喫茶は、南北朝期以降将軍家を中心とした茶事として行われるようになるが、茶を喫する場は一貫して会所など書院造の系譜に属する建物であった。また書院造系統の建物で行なわれる「書院の茶」に対し、「草庵の茶」が千利休によって侘茶として大成され、その流儀を引き継いだ三千家などが今日の茶道の主流となる。

利休が関わった茶室で現存する妙喜庵（京都府大山崎町）の待庵は、書院とは別棟になっており、書院から待庵にいたる通路がすなわち庭園空間としての露地となる。露地は延段（のべだん・石敷の園路）、飛石、蹲踞（つくばい）、石燈籠、塵穴（ちりあな）などで構成され、その趣向やデザインもおおむね利休の構想に基づくものと考えられる。

妙喜庵待庵（露地と茶室）

利休亡き後、豊臣秀吉の茶頭となった大名茶人の古田織部（１５４３～１６１５）は、茶道、茶器などに優れた才能を示したが、露地についても内露地と外露地からなる二重露地を考案するなど、伝統にとらわれない斬新なデザインを好んだ。
織部の好みを最もよく残すとされた茶室は、京都藪内家の燕庵（えんあん）で、その露地は二重露地の外露地をさらに区切った三重露地である。

織部の後を受けて将軍家茶道指南を務めたのがその弟子で大名茶人の小堀遠州である。建築にも優れていた遠州は、幕府の作事奉行などを務め、皇室関連の仙洞御所などの建築と作庭を手がけ、幕府関連では二条城二の丸庭園の改修や南禅寺金地院などの作庭を行なっている。遠州のデザインを代表する茶室と露地と言えば、やはり弧篷庵忘荃（こほうあん・ぼうせん）（京都市・大徳寺内）で、遠州が建築と作庭に関わったが焼失し、その後の再建時に松江藩主・松平不昧らの助力があった。「露結」の銘をもつ手水鉢と寄燈籠（よせとうろう）からなる内露地を室内から見た景色は、縁先・柱・中敷居で横長の長方形に切り取られて一幅の絵画として目に映り、茶室の内外を一体化する。利休の死後三世・宗旦の三子が表千家・裏千家・武者小路千家を興していわゆる三千家が誕生し、今日に至っている。不審庵・今日庵・官休庵（かんきゅうあん）は、それぞれ表千家・裏千家・武者小路千家の茶室の名称であるとともに露地を含む屋敷全体も指す。

第８章　江戸時代

二条城は慶長七年（１６０２）から翌年にかけて、徳川家康が京都警護と上洛の際の居所として造営した城で、家康が将軍となった慶長八年には新造なったこの城が将軍拝賀の礼など一連の儀式の場となった。二の丸御殿及び庭園もこの時期に造られたものである。庭園は公式の対面の場である大広間の西側および私的な対面などに用いられる黒書院の南側に広がっている。大広間からは将軍から見ると右手、諸大名からは左手に庭園が見えることになる。

二条城二の丸御殿

二条城二の丸庭園

京都御所庭園

江戸時代になると、伝統的な池庭の様式に桃山時代に成立した露地の機能とデザインや室町時代後半に確立した枯山水の技法を組み入れた総合庭園様式ともいうべき回遊式庭園が成立する。「回遊式庭園」とは、一定の教養や共通認識を持つ階層（公

家・武家・僧侶など）の間で茶事や宴を催す社交の場として江戸時代に成立した庭園形式で園内を徒歩または舟でめぐることを想定したうえで、池を中心に築山・平場などを設え、御殿や茶亭・四阿（あずまや）などの建物を随所に配し、庭の各部分の景色に象徴的な意味を付したデザインを持つものをいう。このような意味での回遊式庭園は、桂離宮（京都市）として名高い「桂山荘」において様式的に確立された。現在、桂離宮は、面積約 69,000 平方メートルの敷地に古書院・中書院・新書院の御殿群が雁行し、その側面（南面）は、馬場や毬場（まりば）として整えられた平場である。御殿群の前面（東面）に広がる大きな池は、複雑な汀線に縁どられ、大小数個の中島を配した池の東岸の松琴亭一帯には天橋立の景観を模式的に縮小して表現する「縮景」の手法が用いられている。庭園の各部分それぞれが洗練されたデザインを持ち、しかも茶亭をめぐって園内を移動するに従って景色がドラマティックに展開するよう綿密に計算された構成をもつ。

桂離宮庭園

修学院離宮（京都市左京区）は、後水尾上皇（１５９６～１６８０）により、比叡山の西南麓に山荘として営まれた。地形を活かして約４０ｍの高低差を持つ「下の御茶屋」と「上の御茶屋」からなり、それぞれの庭園は景観のほかに舟遊びが楽しめる構成にもなっていた。

菅田庵（松江市）は、寛政四年（１７９２）松江藩家老を務めた有沢家の山荘に藩主・松平治郷（不昧）の好みで建てられた茶室で、その露地及び山荘全体の呼称ともなっている。山荘全体の構成は、山裾の門から樹木に覆われた山道を登って南東に眺望の開けた向月亭の前庭に入り、そこから中門を潜って山里の雰囲気を持つ菅田庵の内露地に至るというもので、空間的特性を活かして、歩を進めるにつれて暗・明・暗と変化する視覚を時間軸に組み込んだ巧みな造形である。（現在改修中）

「江戸の大名庭園」

徳川幕府は江戸の都市整備を進めるとともに、参勤交代の制により大名の江戸集住は制度化し、各大名が幕府から与えられた屋敷地の中には広大かつ自然の豊かな場所も少なくなかった。そこに回遊式庭園を設け、将軍家に対する接待や大名同士の社交、

饗宴の場として活用された。江戸には多数の大名屋敷が造営されたが、現在部分的ではあっても残されているものの代表的なものとして、水戸徳川家の後楽園（文京区）、大和郡山藩柳沢家の六義園（文京区）、小田原藩大久保家の楽寿園（現在の旧芝離宮庭園・港区）、甲府藩浜屋敷から将軍家別邸となった浜御殿（現在の旧浜離宮庭園・中央区）などがある。

小石川後楽園

六義園

領国での大名庭園で現在も良好な状態で残っているのは、高松藩松平家の栗林荘（現在の栗林公園・高松市）、熊本藩細川家の水前寺成趣園（じょうじゅえん）（熊本市）、岡山藩池田家の岡山後楽園（岡山市）、彦根藩井伊家の玄宮楽々園（彦根市）、加賀藩前田家の兼六園（金沢市）、紀州徳川家の養翠園（和歌山市）、広島藩浅野家の縮景園（広島市）などがある。

栗林公園（高松市）

兼六園（金沢市）

縮景園（広島市）

「各地の庭園」

江戸時代が進み比較的安定した社会が形成されるなか、庭園を様々な形で楽しむ風潮が広まった。寺院には池庭、枯山水、露地など各様式の多様な庭園が築造され、また大名のみならず上級武士、豪農、豪商の屋敷にも相応の庭園が設けられるようになる。まず寺院の庭園では、小堀遠州の設計になる枯山水の南禅寺金地院（左京区）、延暦寺坂本里坊庭園群（滋賀・大津市）など。上級武士の桂氏庭園（山口・防府市）、知覧麓（鹿児島・南九州市）の庭園群など。豪商では、東北の港町・酒田を拠点とした酒田本間家（山形・酒田市）の鶴舞園、北前船船主から当地に土着し、庄屋として栄えた尾崎家（鳥取・湯梨浜町）には江戸中期築造の本家（重文）とともに庭園（松甫園）（名勝）が残る。

南禅寺金地院方丈庭園

尾崎家庭園（小甫園）

第９章　近現代（明治以降）

「椿山荘」

明治の元老政治家・山縣有朋（１８３８～１９２２）が明治 11 年頃東京目白の高台に敷地を購入し造営した邸宅・椿山荘は、江戸時代とは様相を異にした新しい感覚に基づくデザインの庭園として、従来の日本庭園に対して、自然主義風景式庭園と呼ばれる。

「無鄰菴」と植治

山縣有朋が明治 27 年（１８９４）から 30 年にかけて京都に造営した別邸。
のちに日露開戦を決定した無鄰菴会議の場として知られる。

作庭の担当者は「植治」こと七代目小川治兵衛（１８６０～１９３３）である。
植治は高い技術と経験をあわせ、南禅寺一帯で對龍山荘（左京区）、有芳園（同）、さらには慶沢園（大阪市天王寺区）、旧古河邸庭園（東京都北区）、有隣荘庭園（倉敷市）など全国的に活躍し、近代日本の庭園をリードする存在となった。
植治は平安神宮の神苑の作庭に招かれ、京都の歴史の蓄積と風土を縦糸に、琵琶湖疎水や行政との関係といった近代の構造を横糸に、見事にその成果をあげている。

旧古河邸日本庭園（植治作）

「三渓園」

明治後期から大正初めにかけて、横浜の実業家で茶と美術を愛好する原富太郎（三

渓）（１８６８～１９３９）が三渓園（横浜市中区）を造営する。古建築の移築も積極的に行い、なかでも紀州藩巌出御殿の遺構・臨春閣、旧燈明寺（京都府木津川市）の三重塔、江戸初期の武将茶人・佐久間将監の作と伝えられる聴秋閣などを移築するなど、変化にとんだ広大な敷地を活かした作庭は、近代日本の自然主義風景庭園として高く評価されている。

三渓園（横浜市）

「重森三玲」

昭和初期から戦後にかけて日本庭園の研究と創作に関わった重森三玲（１８９６～１９７５）は、京都を拠点にして全国各地の古庭園の調査研究を行い（日本庭園史図鑑全 24 巻編集）、あわせて作庭にも携わった。東福寺方丈庭園のほか、同じ東福寺の龍吟庵、大徳寺の塔頭・瑞峰院、松尾大社などに数多くの作品を残している。島根県にも小河邸（益田市）、村上邸（吉賀町）の庭園がある。かっての自宅庭園は、重森三玲庭園美術館（京都市左京区）として残されている。

東福寺龍吟庵（京都市）　小河邸（島根・益田市）　村上邸（島根・吉賀町）

「飯田十喜」

飯田十喜（本名・寅三郎）（１８９０～１９７７）は、明治後期から大正半ばにかけて住宅庭園を多く手がけ、自己主張し過ぎない「雑木の庭」と自ら呼ぶスタイルの庭を作る。旧自邸の旧飯田邸庭園（渋谷区）のほか、等々力渓谷公園日本庭園（世田谷区）などが残っている。

昭和時代の造園で特記すべきは、丹下健三の香川県庁舎の庭園、イサム・ノグチ自邸の庭のように建築家や彫刻家による秀作がいろいろつくられたことである。
さらに近未来の課題として、超高層ビルの外部空間の造園化、大都市のヒートアイラ

ンド対策としての屋上緑化・壁面緑化問題が現実化している。

島根県内には足立美術館庭園（安来市）をはじめ、内外にも高く評価される庭園が、京都に次いで多く存在することは大変喜ばしく誇りに思う。

足立美術館庭園（安来市）

由志園（松江市八束町）

終章　文化資源としての日本庭園

日本庭園は土、石、樹木、水などの自然素材で造られることから、その維持管理が重要な課題である。特に文化財的な価値のある庭園は、その姿を保持することに意義があり、そのためにも伝統技術の保存と継承が強く求められる。

安来市の足立美術館のように、地元に優れた手本があり、国内的には勿論、外国にも高い評価を得ていることは大変心強い。

現在目の前にある庭園は、何時の時代に造られ、守られてきたかに関わらず、現代の美意識・価値観によって支えられているもの、すなわち「現代に生きる庭園」であると言える。庭園が当初どのような意図で、どのような技術をもってつくられ、利用されながら今日に至ったものであるかを、諸資料を駆使して考証しながら鑑賞することが、文化としての庭園を考えるうえで意義がある。日本文化の各時代を知る資料としても、日本庭園は、観光資源としての役割とともに重要である。

【参考文献】

・日本庭園小史	重森三玲著	河原書店
・日本庭園－空間の美の歴史	小野健吉著	岩波新書
・庭園史をあるく	武居二郎ほか著	昭和堂
・作庭記と日本の庭園	白幡洋三郎著	思文閣出版
・日本の庭園	吉田鉄郎著	鹿島出版会
・日本庭園の伝統施設	河原武敏著	東京農大出版会
・日本の庭園－造景の技と心	進士五十八著	中央公論新社
・日本庭園鑑賞事典	大橋治一ほか編	東京堂出版

＊写真は全て筆者（山村賢治）による。